

麗華は自分の額が切られたことを理解するのに、数秒を要した。

ハラハラと前髪が舞い落ちて。霞む白煙の向こうに、大太刀を鞘に納めるシルエットを目撃する。

「久しぶりだね、竜胆ちゃん。牽制のつもりが前髪までバツサリいっちゃったけど……うん、姫カットの方が似合っているし、問題はないね♪」

自分がARRAsを抜けた時から相変わらずのふざけた態度に辟易した。

麗華は苛立ち混じりに、彼女の名を吐き捨てる。

「貴様こそ、剣の腕が鈍ったんじゃないか？ 未那月美紀ッ！！」

「ふふっ、それは果たしてどうだろうね」

その手には愛用の拡声器は握られていない。それは身の丈ほどあろう大太刀を存分に振るう為であった。

彼女は剣柄に指を添えながら、夕星たちを庇うような位置に立つ。

「神室くん、君もよく務めを果たしてくれたね。〈エクステンド〉なしで竜胆ちゃん相手に

よく時間を稼げたものだよ」

「未那月先生……けど、先生がなんでここに!?!」

「……ん？ なんてって、君が助けを必要としたからじゃないのかい？」

未那月と共に廃ビルへ飛び込んだミサイルは、彼女が待機していた一室の砂塵に変換することで創り出されたものだった。

「私は咄嗟にミサイルに刃をブツ刺して、一緒に飛んできたのさ。君のエゴシエーター能力に呼ばれた気がしたからね」

それはめちゃくちゃな理屈だった。エリアズの基地から廃ビルまでの距離を駆け抜けるミサイルに飛び乗って尚、振り落とされない彼女の身体能力は、明らかな常識外れである。

「これでも足腰は鍛えてるんだ。剣技は趣味でね、鍛錬を怠る気にもなれないんだよ」

「……んな、無茶苦茶な」

ひとつ分かったことがあるとすれば、助けを必要とした夕星のエゴシエーター能力がこのような結果を招くケースもあるということだ。もつとも、今回のケースに限っては「それに飛び乗ってこれる未那月が大概である」という前提付きなのだ。

「それよりも、今は藤森委員長の措置からだ。これを使いたまえ」

彼女が投げ渡したそれは、傷口に充てる止血パッチのようなものだった。

「A R A s製の救命シールさ。押し当てる面に染み込ませた生態ナノマシンが傷口を補修してくれる優れものだよ」

「貴様らの蘇生措置を私が呑気に見ているとでも」

「おっと、そうだったね」

麗華の身体が粒子と化して、空間一体に溶け出していく。次に再構築される先は、未那月の懐。杖が狙う先も未那月の喉元一点だ。

「未那月刀剣術——牛式・居合」

だが、それも引き抜かれた大太刀に阻まれた。

流れるような未那月刀剣術の型式はそれだけで飽き足らず、杖を根元から断絶して見せる。

「もちろん、君のことも忘れてはいないよ。竜胆ちゃん」

斬られた杖は金具が外れ、先端に収まっていた宝玉が無惨に足元へと散った。

「ツツ……!?!」

「神室くんに託したGPSを頼りに、この廃ビルへ医療スタッフと作業員を派遣しておいた。だから、私の勝利条件は極めてシンプルなんだ」

未那月にとっての現場における勝利とは、エゴシエーターと一般人を麗華に殺されないことだ。

その目標を達成する為の条件は二つ。

「神室夕星と藤森陽真里陽真里を無事、エリアズで保護すること」

「その妨害を試みる竜胆麗華を無力化すること」

そこまでの条件を脳内で整理した未那月は、獲物を見定めた獣のように踏み込んだ。彼女が握りしめた大太刀が空を裂いて、白銀の軌跡を残す。

「未那月刀剣術——寅式・袈裟斬!」



未那月は自己紹介に際し、必ず自分のことを「未那月刀剣術の師範代」であると語る。けれど、エリアズに在籍していた頃の麗華がどれだけ「未那月刀剣術」を調べようとしても、該当する流派や剣術は存在していなかった。

それに彼女は、自らをミステリアスに演出しようとする趣向をしている。組織の代表でありながら進んで潜入任務を請け負ったり、回りくどい喋り方で真偽を曖昧にしようとする

るのも、彼女の悪癖からくるものだ。

だから「未那月刀剣術の師範代」という肩書きもそんな演出に過ぎないと。腰から大太刀をぶら下げていようと、それは単なる彼女なりのキャラ付けで、実際の彼女は荒事の一つも満足にこなせなき可憐な女性に過ぎないのだと。

少なくとも、A R A s にいた頃の麗華は勝手にそう解釈していた。

だが、彼女は程なくして気付くことになる。自らの軽率な誤りに――

「ふふっ。こうして二人で斬り合っていると、なんだか昔を思い出しちゃうね。竜胆ちゃんがエリアズに居た頃は何度も実戦訓練をしたんだから」

麗華の反射神経を持ってしても、迫る袈裟斬りを躲す余裕がなかった。だから粒子化のワープで後方に飛び退こうとするも、振り下ろされた大太刀が分解前のローブを裂く。

「チッ……!!」

はじめに未那月の恐ろしさを思い知らされたのは、その実戦訓練の時だった。

こちらはエゴシエーター能力の全てを解放し、魔女として全力で応戦したのに関わらず、竹刀一本で完封されたのだ。渾身の一撃で腹を突かれ、血の混じったゲロを吐かされた屈辱は昨日のことに覚えている。

「私の剣がどうこの前に、鈍ったのはそっちの魔法じゃないかな？」

「ツツ……私をあの頃のままだと思うなツツ!!」

A R A s を離反してから三年の月日が流れた。その間に麗華は数多のエゴシエーターを殺害し、戦闘経験を積んできたといえよう。

A R A s にいた頃は座標のコントロールが満足にできず使いこなせなかった粒子化によるワープも、この三年でものにしてみせた。エゴシエーター能力の成長に伴い、僅か数単語の短な詠唱で運用できる魔法も増えたはずだ。

では、何故だ。何故、自分魔法は彼女に届かない。それどころか、何故自分だけが一方的に彼女に斬られ続けている？

体重移動と軽率な足運びから成る、変幻自在の斬撃は絶え間なく振るわれ続けた。目を見開いても追い切らない剣速だ。瞬きなどしようものなら、一瞬で細切れにされる。

「◎◎ツッ！」

「おっ、新しい魔法を会得したみたいだね。けど、残念」

未那月から見て、完全に死角となる背後から鎖による奇襲を仕掛けたはずだ。

だと言うのに、彼女は身を捻り、鎖を躲して見せる。そこにはパチンと左目でウイंकをすする余裕さえ介在していた。

一方の麗華は、「魔女」の象徴とも言える三角帽やローブは切り刻まれ、携えた杖すらも破壊されている。エゴシエーター能力の作用によって強固に作り替えられた身体も、いまや裂傷まみれの満身創痍と化していた。

「その傷を治したい」って願うみるのはどうかな？ 君のエゴシエーター能力なら、それも叶えられるはずだ」

普段の未那月であればそれも容易なことであった。だが度重なる現実改変は、相応の負担となつて彼女の身を蝕ぶ諸刃の剣だ。もはや彼女に自らを「全快の状態」へと創り直せる余裕はない。

「簡単に言ってくれるなよ……怪物め」

そう、目の前で刃を携えるこの女は怪物だ。

非エゴシエーターでありながら、エゴシエーターを圧倒できる存在をイレギュラーな怪物と言わずして、なんと言えばいい。

ノンフィクションの側に立ちながら、フィクション側の概念のことごとくを切り裂いていく剣技は、とつくの昔に神業の域へと達している。きつと同スケールの殺し合いで、この怪物に勝る生物はこの世界の何処にもいないのだろう。

「怪物って……私のことは昔みたく相棒って呼んで欲しいんだけど」

「誰が貴様のことなんて」

麗華にしてみれば、彼女の瞳が歯車状に変容していないことの方がよほど理不尽であった。

「私の悲願は全てのエゴシエーターを殺し、この世界の变革を止めることだ……ただ、そこには一つの例外がある」

指先で拳銃を形作りながら、麗華は立ち上がる。彼女の指先に展開されるのは、これまでと比べてあまりに小さな魔方陣であったが、その照準は一ミリたりともずれていない。

「エリアズ代表未那月美紀。貴様だけはエゴシエーターでなくとも、必ず殺してやる」

「へえ、それで……理由はあるのかい？」

未那月はわざとらしく、小首を傾げてみせた。

彼女が怪物じみているのは何も、剣技だけじゃない。A R A s が組織されるのは今から十年前だと記録されている。だが、当時の彼女は齡十七歳の何処にでもいる女学生であった筈だ。

金もなければ、コネクションもない。そんな子供一人が、今や世界の危機と対峙する秘密結社を編成し、組織の運用を成している。

「未那月美紀。貴様は持っている力は底が知れない。人並外れた剣術の才も、言葉を交わした相手の心を籠絡し、自らの私兵へと変えてしまう人心掌握術も。お前が持つ才能のほんの一端に過ぎないのだろう」

では、そんな彼女が率いるエリアズはどうして現状維持に甘んじている？

スターレター・プロジェクトや、エゴシエーターに纏わる謎がそう簡単に解き明かせるものでないことは重々承知の上だ。

それでも、麗華には納得することができなかった。かつて幾つもの任務を共にした自分だからこそ、未那月美紀という人間がどれだけ規格外なのかは、誰よりも熟知している。

「貴様は楽しんでるんじゃないか？ エリアズを率い、懸命に努力するフリして。その実、腹の底ではこの世界が歪曲していく様に心を踊らせているんだらうッ！」

それは麗華が苦悩の果てに辿り着いた一つの仮説だ。

「ふむ……面白いことを考えたね、竜胆ちゃん。もしかして私の元を離反したのもそれが理由かな？」

「今は私が質問していいんだ！ それとも答えられないのか、この怪物めッ！」

怪物と呼ばれた彼女の口の端が三日月のように吊り上げられた。

嬉々として答えようとする未那月であったが、その続きが明かされることはない。

——何故なら、二人が立つ足元が砂塵と化して抜けたからだ。

足元だけじゃない。廃ビル全体が砂塵と化して、一点に集約されてゆく。

そして、砂塵の中核を担うのは、瞳を歯車状に変容させたエゴシエーター・藤森陽真里で

あった。